遺跡がつなぐ過去と現在 ②

天理大学文学部教授
桑原　久男　*Hisao Kuwabara*

モースとふたつの石碑　―大森貝墟碑―

この５月、日本考古学協会の第 81 回総会が帝京大学で開催され、新緑の東京を訪れた。毎年恒例の学会であるが、今回は、昨今の外国人観光客の増加によってか、昨年までと違って都心では週末のホテルの予約が取れず、それならばと、品川駅から京浜東北線で２駅目の大森駅近くに宿を取った。この機会に、日本考古学発祥の地とも呼ばれる大森貝塚を久しぶりに訪ねてみようと考えたからである。

ＪＲ大森駅の北口を出て、大通りを東に数分歩くと、道沿いのビルの前に、「《大森貝墟》碑の由来」を記した真新しい標識と石碑のレプリカ（2 分の 1 の大きさ）が設けられている。設置されたのは昨年のようで、標識が示す道順に従ってビルの隙間の狭い通路を抜けて階段を下りると、引っ切りなしに電車が行き交う線路が目の前に現れ、線路とビルに囲まれた窮屈な空間に大きな石碑がたたずんでいる（写真１）。この石碑は、大正 14 年（1925）、大森貝塚を発掘し、江戸・明治期の文化を海外に紹介したエドワード・シルヴェスター・モース（1838 ～ 1925）の訃報が伝わり、それを受けて、その弟子ら 6 名が発起人となって、大森貝塚とモース博士の功績を顕彰するために、記念碑の建造が計画され、昭和 5 年 4 月（1930）、序幕式が行われたものである。石碑は、理学博士佐々木忠次郎の書になる「大森貝墟」の文字を縦書きで大きく刻んでいる。石碑近くの通路には、今から 40 年近く前、1977 年 10 月、地元の企業や有志団体が大森貝塚の発掘 100 周年を記念して設置した小さな説明板が掲げられている。

写真１　大田区の「大森貝墟」碑（筆者撮影）

大森貝塚碑と遺跡公園

大森貝墟碑から大通りに戻り、道路沿いにさらに東へと少し進むと、右側に現れる緑豊かな公園が「品川区立大森貝塚遺跡庭園」である。大森駅や大森貝墟碑のある場所は、東京都太田区であったが、いつの間にか越境して品川区に入っているのである。実は、この公園奥の線路際にも遺跡を記念した有名な石碑があり（写真２）、こちらは、「大森貝墟」ではなく、横書きで「大森貝塚」と文字を刻み、「昭和 4 年 5 月 26 日起工」と記されている。発起人は、毎日新聞の礎を作った実業人であり、考古学にも造詣の深かった本山彦一である。ほか、賛同人として 8 名が名前を連ねている。相前後して、「貝墟」と「貝塚」のふたつの石碑が建てられた背景には、モースが報告書等に発掘地点の正確な場所を記さなかったことや、発掘参加者の曖昧な記憶などから、発掘場所に品川区説と太田区説の二つが存在し、長い間決着が付かなかったことがある。しかし、その後、発掘に関わる公文書が確認され、また再発掘調査が行なわれ、品川区の「大森貝塚碑」のある場所が、モースの発掘した大森貝塚であることが確定することとなった。昭和 30 年（1955）、品川区の大森貝塚は、太田区の大森貝墟碑も含めて国の史跡に指定され、現在は、遺跡公園として、地域住民だけでなく、関心のある多くの人が足を運ぶスポットとなり、また、出土遺物や関連資料は、近くにある品川歴史館に展示されている。公園内は、少し高まりとなった旧地形を残し、線路際の崖面は、遺跡の再発掘調査で確認された貝塚の土層が樹脂で固定されている。また、モースの銅像が設置され、遺跡の説明板では、縄文時代の文化の変遷や暮らしの様子が解説されるとともに、貝塚を発掘したモースの事績を伝えている。縄文時代、そして、考古学の黎明期であった明治の時代…。そう、ここでも、遺跡という場に、時間が重層的に積み重なっているのである。

写真２　遺跡庭園内の「大森貝塚」碑（筆者撮影）

大森貝塚の発掘調査と報告書

さて、モースの来日の目的は、専門とする腕足類の研究を行うためであったが、明治 10 年（1877 年）6 月 18 日に横浜港に到着し、開通したばかりの鉄道で東京に向かう途上、線路際の崖面で貝塚を発見したとされている。その 7 月には請われて東京大学動物学・生理学教授となり、9 月にはさっそく大森貝塚の発掘に着手している。同年 10 月、大学で進化論の講演を行い、ダーウィンの進化論を日本に最初に紹介したことでもよく知られている。1879 年には、大森貝塚の報告書 “Shell mounds of Omori” を英文で刊行し、同年、矢田部良吉口述、寺内章明筆記による『大森貝墟古物編』を刊行している。英文報告書で用いられた Cord mark の用語は、弟子たちによって、「索紋」あるいは「縄紋」と翻訳され、「縄紋（縄文）」の用語は、今に至るまで長く用い続けられている。

大森貝塚の発掘報告書の冒頭で、モースはまず、ダーウィンの偉大な著作『種の起源』（1859）によって人類史・動物の進化に関する考えに革命がおき、人類学・考古学・民族学が出現したことで、人類の遠古史解明に新しい推進力が与えられたと記している。当時、世界の各地で貝塚遺跡が見いだされ、学問的な調査が進展しつつあることを認識していたモースは、日本における貝塚の調査の重要性をいち早く察知していたのである。報告書では、発掘で収集された骨角器や石器、土器、各種の動物遺体等が図版を添えて詳しく記載され、今も東大に保管されている当時の遺物（1975 年に重文指定）と照合することが可能となっている。

しかしながら、大森貝塚に関連して最も興味深い発見の一つとして、モースが報告書で多くの頁を費やしているのは、「食人の風習」の証拠に関する事柄である。（続く）